

『よしのずいから』追補

すいか

誰何の歌

「塔」「二〇一三年」十一月号、真中朋久歌集『エフライムの岸』の書評（朝井さとる執筆）に瞠目した。

〇〇三〇年頃、イエルサレム郊外

かの夜はペテロのみならず「ガラリアの者」ゆゑの誰何あまたありぬべし

『旧約聖書』士師記

シイボレト（つぎ）シイボレト（言つてみよ）シイボレト（ゆけ）シボレト（みたぞ）

一九二三年、東京

じふふんごじつせんちうふんごじつせんじふふんごじつせんごじつしえん

書評の後半でこの三首を挙げ、朝井氏は書く。

〈連続して置かれているこの三首、詞書なしで「何の話か」分かる人は多いと思う。一、二首目は、悲劇の民ユダヤのもう一つの暗黒史、繰り返された部族間抗争について。一首目、イエス逮捕の夜、同じガラリア族の人々が、同胞民族の下役人の誰何を受けたであろうという暗い想像。二首目は『旧約聖書』中の「士師記」にある一事件。「シイボレト」の「シ」の発音によってエフライム族を識別し、ヨルダン川岸で殺戮したと伝えられる現場の再現に絶句する。二千年余りのち、関東大震災下の日本で同じ暴挙が行われたのは三首目の通り。怒りや嘆きの言葉を一切添えず、人間はときどきこんなことをすると、同じ人間として真中は三首をただ並べている。〉

長い歴史の中の共通項を抜き出し、三首にまとめた思惟の深さと冴えに驚く。一首目、「ペテロのみならず」の句で同じ立場だった民衆を一首の主体として引き出す。二首目は踏絵にも似た具体的な誰何の場面で、短い語のやりとりの緊迫感が凄まじい。「誰何する」側と「される」側を区別する（ ）が無機的で恐怖を煽る。三首目も同様に発音を並べて再現した。地方訛りも混じる平仮名表記の羅列にリアリティが感じられる。

二、三首目の表現からは誰しも土屋文明が一九四四年に中国を旅して詠んだ、

馬と驢と騾との別を聞き知りて驢来り馬来り騾と驢と来る

『葦青集』

を想起するだろう。文明の歌は現実を突き放して詠み、底知れなさを思わせる。この三首は歴史に対する想像力を収斂、凝縮して現実の問題に繋げている。朝井氏の書評は『今』『ここ』『われ』の外より」と題し、「今」でない時間、「ここ」でない場所、「われ」でない他者の存在が歌人の意識、無意識の中に構造化されていること」の大切さを衝く。

（「新暦」二〇一四年一月）